８、約束

　――それは、ウザーポド大陸南部、白銀の永久氷雪地域にある、全てが水由来の建造物でできた、世界でも最も美しい古都の名称である。ここに、十億を超える年月の前から代わりなくその偉大な力と姿を維持して君臨し続けるのが、知性と美、慈愛を司るとされる水の女神メシャドである。美といっても、彼女が美人であるかどうか、単純な美人画を描くことはできない。メシャドに拝殿を許された者は、ただ超越的に美しい、というその真実としての印象だけが感じ取られ、認識されるのである。だから、美的概念が異なるどの種族も一様に彼女を美しいと思うし、平均容姿的に誰しも愛さずにはいられないような女性のことを一般に『』と形容するのもこのためである。

今でこそ世界の宗教で大地神に匹敵するほどの信者を獲得している彼女の水神教であるが、かつては苦労が絶えなかった神であることも知られている。

混沌大渦由来であるクナウザスの超生物群に対しては、大なる海洋や命の水といった概念は母性的な説得力に欠けるため、初期には四大中で最も水神の臣下が少なかった。そこで、生まれながらにして最も造詣の深かった梵子術の知識神でありながら、後に世界三賢聖の一人と称されるを駆使し、素梵子生命体的人種――これがいわゆる後の『雪聖』族である――を大量に作った他、周囲の地域に住んでいた邪悪な生物と粘り強い交渉や激戦を繰り広げ、彼らの中で能力のある者を取り立てるなど、ほとんど人間の勢力争いと変わらないようなことをやらざるを得なかったのである。

ちなみに、ガラシャレーズル大砂漠に生まれた風のキルケスにおいては、高山帯に住む優秀な超獅子鳥族にはまさに待望の神と思われ、呼ばずとも各地からバサバサと翼をはためかせて集まってきたし、その後も陸に上がったばかりで拠り所を探していた砂魚族の祖先が自分達の方から喜んで彼を奉った。火のリグアは原始時代に主流だった暗黒系・混沌系の種族に好かれやすかったし――それゆえのジレンマもあるが――その恐るべき戦闘力と火山噴火という現象に恐れをなし、従属はせずとも逆らう者など全くといっていいほどなかった。地神オゼリアに至っては、およそどこであろうと地と土に関係しないでいられる場所もないのだから、ほとんど全ての土着的宗教が渾然と帰順していくように彼の姿を借りた。

水の教義は社会性を維持する理学を必要とする際に最も利用価値が高かったから、共知種族が台頭するに従い、すなわち現代に近づくほど勢力が伸びることになる。しかし、クナウザスの民の歴史が『神を利用している』ように見えるからといって、他の世界に住む者が何か意見を言ってみようなどとは考えない方が良い。こういうこと、いや、もっとひどい茶番的信仰劇がどこでも行われているものであるのだから。

ところで、メシャドがようやくその地位を他神に拮抗しうるものとして確立したのが、神話戦争停滞期後代における海洋神戦争以後であることはあまり知られていない。彼女はそれまで自分の概念領域にある海や川、雨などの区別をほとんど感じていなかったが、やはり海洋世界とはその大きさと意義からいっても少し異なる聖域なのだと感じるようになった。この後、配下の者を下位神として据え置き、組織的に信仰力を処理するようになる。例えば雨神サプルホ、山河神シル、氷河神ミョーツ、…数え上げればきりがない。

このように少々『神』らしからぬ明確性を考案したもう一つの理由がある。彼女は神気の影響力を操縦する術法を創って使い、その偉大な力にもかかわらず『小型の神』とも言われる。『小さくて強く、さらに美しければ言うこと無し』と自らを賛美して彼女は高慢に他神を怒らせたものだが、それゆえに比較的遠慮なく世界に実体として存在し続けることができたから、前述の措置は『自分の意義ばかりが大きくなりすぎないように』という判断であり、自分への足枷でもあったのだ。事実、『信仰の暴走』は近代における創世主降臨一ヶ月ほどの短い間であったため、『神代の夢』とも呼ばれるという一大事件の引き金となっている。

だが、海にだけはそういった部下としての神を彼女は置かず、自身で直接統治している。別に神でなくとも、生物でなくとも、浜辺の砂粒ですら海とは大きく、美しいものだと感じ取れるであろう。まさに彼女が司る美と慈愛――そして、この中に一瞬泡のように見え隠れする、闇。それが、海溝の中で成長して大陸棚を伝い、ついには世界全体を覆いつくさんとしたとき、彼女は自分自身の力で、もう一人の自分であるというより他はないそれと決着をつけねばならないと感じた。

――現代からおよそ四億年前。このとき、混沌と闇を司る暗黒神ツァルツは深い傷を負って闇の森に隠れていたし、それが癒えるのはまだ先の話である。そもそも神話戦争の発端であり、以後もしつこく世の中の混乱を狙う彼が九億年も前にこれほど手酷くやられた相手とは、あの火神リグアであった。余の配下にもいそうなしなびた骸骨ごときが、闇に組むべき冥府の王としての概念を掌握しているなどとは――とツァルツは考え、神話戦争停滞期で各神が閉じこもっているのを良いことに、日ごろ部下を多くつけずにぐったりしているだけの軍神の寝首を欠こうと、暗殺者を仕向けたのだ。だが、この小さな嫉妬にも見える間接的攻撃の代償は高くついた。

ちょうど数千年に一度の鬱屈期に入っていたリグアは、起こされたことを火山の爆発のように猛々しく怒り、暗殺者を切り刻むとすぐに腐竜の姿となってフラバン大陸に飛び、ツァルツの暗黒結界も障子同然に引きちぎって彼の皮膚を焼き尽くしつつ滅多刺しの刑に処してしまったのである。なぜか止めだけは刺されなかったものの、それは彼を数百回殺傷することのできる有り余るほどのダメージであったから、それを闇の神は時空因果を歪ませて完全体に戻るには十億年回復させ続けなければならない分割返済借金のようにして何とか命を取り留めるのが精一杯であった。…だが、これで懲りるツァルツではない。

大分傷が治ってくると、今度は水の勢力を狙うべく、部下である巨大な化け物の種を深海に派遣。それは海神を名乗り、自らの育成を鯨族の皇帝に命じた。一方でメシャドの愛は海だけでなく大地の上、大気中、生物体内にすら存在するあらゆる水と共時的に存在している。そのため、クナウザス人類史上最大の権威を得ていた鯨族が元来水の女神に対して向けていた、海だけを優遇するという信仰と神の実在はひどい不一致を起こしていたから、彼らにとっては『真神』が降臨したと感じられたとしても無理はない。

それは『偽神』メシャドに対しての逆恨みに似た動きとなった。慢心した鯨族はあろうことかこの偉大な女神を支配下に置くため、水の都に大艦隊を寄せ、海中から梵子弾の嵐を放った。美しき白銀の野や街は焦土と化し、一ヶ月で雪聖族の七割が死滅したとされる。このとき女神の腹心『氷女竜ウ・レイハ』が海洋帝国軍の奇襲作戦を助けた彼女はその妹竜によって倒されたといわれる。そして、ウ・レイハの部下で裏切りを実行し、水の神に見切りをつけて大陸を渡り、相反する神に仕えた者達が『死の焔』とカザリフビー族の創始である。

これら一連の流れは、何もかもを混ぜ合わせてしまう水の善さの裏返しであり、水質浄化によって吐き出された必然的澱みであり、豪雨や海難の恐怖であり、すなわち水のかけがえなき一部である――少なくとも女神はこのように考え、敵を一切恨まなかった。しかし、愛する世界の健全なる存続のため、彼女にはあきらめるという選択肢などありえない。

水の女神は『汝のことなどどうでもいいが、負けてもらっても困る』などという他神のムカツク支援の申し出を断り、たったの独りで海洋帝国全体に報復攻撃をしかけた。だがそこは、さすがに最高の知性を司る彼女である。海神となって水神の座を奪おうとしていた化け物が、肉体は完成したがまだ脳幹が発生しておらず、全く動くことができないことをメシャドは感知していたのである。これを倒すにはまさに最後にして絶好の機会であった。

当時、慈愛の女神は実質的な神気による戦闘力は四大虚神中最も低いといわれていたから、以前以後問わず人類史上最高の梵子科学技術を極めていた海の人々は侮った――そして思い知らされたのであった、真の神の力を。

彼女はそれまで別の時空に分け置いていた力を全て引き出した。そして、女神が腕を振り上げ、『奢れる智者に凄絶なる生命の停滞を』と恐るべき宣言とともに振り下ろしただけで、深海に隠されている帝国の全拠点に巨大な氷塊が豪雨のように降り注いでいった。こうして、神の怒りに触れた愚かなる知的生命種は何の抵抗もできず滅亡しゆくかに見えた。

自らの引き起こした強すぎる干渉は神としての我が誤りである、と海上に物悲しい表情で立ち尽くす女神の前方が小山のようにうねり、波が飛沫を上げて浮上する巨大な黒い塊を取り巻いた。『まだ完成には二年以上かかるはず…』女神の何物をも見抜く目が化け物の中枢部に見出したのは、意外にも美しい少女の姿であった。

*『――私は、海神ラースリュ――』*

それは名乗るや否や、力を使い切ったメシャドに無数の触手を打ちつけ、彼女の強力無比な梵子防護磁場を幾層も破壊した。

「…そう。あなたが、もう一人の私だったのですね。世界と共に生まれし、概念の背中合わせ」水の神は風の神とともに『若さ』も司っている。――神としての最高の知性と知識量を持ってしても、まだ推し量れぬ運命という決して見えないもの。『ゆえに運命、予め視えたら其れではないのです』

　メシャドは自らも最終兵器である水神気の素梵子鎧を召還して身に纏い、波を吹き上げて海中に没していった。怪物もまた、海深く戻っていく。最終決戦の火蓋は、『空経海溝』を舞台として密やかに切られた――

「脳幹が腐っていてね。もう決して動かすことはできないのだよ」

　星者としてはかなり大柄で、金属の反射がいつまでも神秘的な輝きを保つ全身鎧に身を包んだルスマール172世は、自ら砂魚の少年を皇居地下へと案内しながら『鯨族の栄華を偲ばせるモニュメント』とやらを見せてくれた。全長三十ｍにも達しようかという巨大かつ禍々しきその全身を見るには、螺旋状の自動昇降階段を延々と巡らねばならない。これが、代々の沈星皇帝が客人をもてなす時に一番最初に行う慣わしであり、現皇帝の数少ない楽しみの一つのようなものだった。

しかしカルツ・ピルスが、城の入り口から観える不気味な頭部だけを発見して口を半開きにさせたとき、「驚いていらっしゃるようだが、地上では玄関に花も生けないのかね」と通例の文句で少年の肩にその大きな手をポンとやったのだが、彼は全く意味がわからずに随分変な顔になって大人を見上げたものだった。

「いや、失礼。冗談が過ぎたかな」鯨の壮年にある男は、自分の言葉がいつも以上の功を奏したことに満足げだった。「つまり、全く役に立たぬ代物だ、というわけだ。見かけは面白いが、それ以上の効果はない。まぁ、それでもこうして新しい知人を得る喜ばしいときには、目を惹く花瓶同様、なかなかの仕事をしてくれるものだがね」それはどこか自虐的な雰囲気を醸し出し、普通なら『ほほぉ』とかなんとかで深く追求することを避けるものだが、この少年は妙な親近感を覚えてこの『おじさん』を見上げた。

「あの、閣下、俺…　いや、は…」

「何だね、普通に話しなさい、いつもの君の言葉で。私は言語学が世の中の学問で一番好きでね。君の本当の話が聞きたいのだ。遠慮することは何もないのだよ」そんなこといわれてもなぁ、とカルツは余計に恐縮しつつ、黙るのは余計に失礼だと思ってとにかく話し出した。「僕、この姿がとても格好いいと思ったんです。何でできているんですか、これは」

地上人がこれの話題に食いついたのは二百年ぶりくらいだろうか、と皇帝は父の後に付いて回って海神の屍についての『お話』をせがんだ自分の幼少期を懐かしく思い出した。「ふむ、まだディナーの時間までかなりある。少し散歩がてらにご説明申し上げるとしようか」

皇帝が僅かに身じろぎしただけで背後に控えていたもの達がすばやく動き、螺旋階段の動力を入れた。死んだ皇子達がこの巨大なモノに何らの興味も示さず、強制的に連れて行っても居眠りしているような始末で、いつのまにか皇帝自身もあまり見に行かなくなってしまっていたから、ごぉんごぉんというこの昇降機械の音も耳に懐かしく聞こえてきた。しかし新しい子供だけは、見た瞬間に飛びつくようにして玄関先のモニュメントを見上げ、見下ろし、大はしゃぎしたものだった。忙しい合間でもお構い無しに『お父様お父様』と抱きついてきて、元気すぎる子犬のように彼の手を引き、自動階段が遅すぎるとばかりに自分の足で駆け下りていくミャンレを、彼は思い出し――目を力強く閉じてその幻影を打ち消した。

「君は、機械生物のほとんどは深海に住んでいるということを知っているかね。いや、けっこう、実はこのことは最近我が知恵袋たる学者達が突き止めたことだ。あそこでは梵子の影響を受けない純粋元素が溜まりやすい。空と同じく大地世界より遠い、いわば地下にも近い。優れた圧力。それでいて液体というものは、君、学校でも習っただろうがね、実験場としては固体や気体中よりはるかに適した組成といえるのだよ」

　彼らは階段を中腹まで来た。何十本という巨大な触手に手で触れられるほどの距離を、階段がゆっくりと下りていく。

「はい、閣下。僕は梵子隔絶理論が好きで本を少し読んだことがあります。水にある種のエナギーと分子化合物を取り混ぜて、…っと、何かすると、生物の元となるちっぽけなものをいくつか取り出すことが、…できるとか」いつかワナ・クヴァイがやってしまったような知ったかぶりをド偉い人の前でよくも抜け抜けやれたもんだ、と少年は唇を歪めて大人を見上げたが、彼は子供の話に目を輝かせているようだった。

「君は実に筋がいい。もし君のような…　いや、…　君、まさに海こそは母なる世界、いや、別世界、大地と拮抗するほどの力を持つべきだったのだ。だが、足りなかったのだよ、少々の味付けがね」皇帝は右前方に突き出している触手に手をやって軽く叩いた。ぽすぽす、という変な音が聞こえる。「君、少し舐めてみたまえ、こうやって」彼は舌を１ｍほども伸ばして触手をベロリとやった。

『うわー、キター、きたぞ。ここまでうまく行き過ぎていると思ったんだ。もうこれでオシマイだ』少年は覚悟を決めて触手が一番接近したところで小走りに近づき、両手を添えて顔を近づけ、ぺろんと舌を跳ねさせた。触れるか触れないかくらいでごまかそうと思っていたのに、不規則な振動のせいでバランスを僅かに崩し、舌が刺さるのではないかと思うくらい強く押し当てて唾液を擦り付けてしまった。

「うっひ…！　…ん、しょっぱい」

神妙な顔つきになって手で口を濯ぐような仕草をしている子供の両肩を、愉快そうに皇帝は手で揉んだ。彼は『イテテ』と思ったが、それはあの大きな鋏で叩かれたときの屈託のない人懐っこさに似ていると感じ、嫌な気はしなかった。

「うむ、地上と天の人が同じ味覚を持っているということが一つ証明されたかな。これで君の疑問も解決しただろう。そう、この生物体、いや、機械、まぁどちらでもいいがね、その殻はおよそ六割もがでできているのだよ」

「世界で一番硬い物質…　そうか、深海はその宝庫らしいですね」

「うむ、知恵が深いな君は」そんなの誰でも知っているのにお世辞言って、と少年は思ったが、まんざらでもなく表情を緩めてしまう。「炭素完全凝縮以上の代物だが、かつては硬すぎてこの物質は同じ分子同士を高エナギー状態で当てても反動抵抗現象を起こして壊れた部分を互いに修復しあってしまう。空に繋がると噂される海溝の真実を隠蔽するために存在しているといわれる掘削すらできないから何の役にも立たなかったがね。今では廃れてしまったが、当時超越的な理学を究めていた我々の科学をもってしてもだ」彼は前皇帝の口真似をするように空を見上げて語りだした。

「しかし海神の胎児は、この塩を命の水と思って吸い上げ、日々成長していった」話し手は、さも自分で見てきたかのように話したが、これも古くからの慣例である。「我々はそのとき思った。海とは本来塩気が必要なのではないか、そうでなかったから我々の血潮には色素がなく、その知性だけが発達しすぎたのではないかとね」

それはちょっと強引過ぎる、他の海洋生物や海から陸に帰順した砂魚族だって血は赤だったり黒だったり青だったりするし、透明だって一つの色であるだろう、いつだか見た星族の血液はそもそも少し白っぽかったじゃないか、と少年は思った。彼らは学者でもなんでもないので間違いのないように注釈を加えておくと、後に整理される生物学的見地からすれば少年の思いつきの方が正解に近い。祖先同様肉体は大型だが海中でしか動けぬほどに動きが鈍く、生殖能力も低く、成長が遅かった鯨族は、生き残るために知性を極限まで発達させたと考える方が自然である。

ところがその神のごとき知性ゆえに、ある種雄大で慎ましかった祖先の生き方を忘れて傲慢となり、やはり海も世界の一部として大地のゆりかごの中で作られたことも脇に置いて、彼らは大海の概念が求める無意識の叫びを背に受けて増長し、滅びる運命にあったのである。その哀しき血の定めが色素に現れているとしたら、やはり皇帝の言も真理を得ているといえなくもない。

その後、鯨族は滅びの日から綿々と時を生き抜いてきたのではなく、自由進化による遺伝的エラーを防ぐために冷凍睡眠を自らに施すことによって、梵子コンピュータの計算によって予言された、星が沈む日の二千年前まで人工的にプログラムした適応進化をカプセルの中で繰り返し、星者として生まれ変わったのであった。海洋の中で育まれた世界唯一人種としての誇りを、そのまま変換して天界に移しただけで。

それも、今や再び完全に終わろうとしているように皇帝自身密かに思っていた。――それも悪くない、我々は少々疲れ始めている。生物種として、生きることに飽き始めているのだ。時として、地上の常に若く無様な進化と退化を繰り返す連中がうらやましく思われるほどに、我らの歪みは極大値を迎えている。人類の唯一種族であらんという我々の遺伝的衝動、それは、例えば実験室のごとき低い次元レベルの世界ならまだ可能であろう。まぁ、そこでも酷い醜態を晒しかねないが――、

そして――海神がただの化け物として滅ぼされ、拠り所を失った祖先がすがりついた神――幻影と、虚妄。天界からの地上支配。復讐の誓い――それは果たして、本当に我々のものだったのか。そうであれば、滅びすら誇りを持って受け入れよう。しかしもし、それすら何か見えざるより巨大なものの押し付けでしかなかったのだとしたら、一体我々が紡いできた生と死は何だったのか。その答えをピルス君が、陸から海の秘石を携えて天空に昇ってきたこの少年が、持っているような気がしてならない――

「君は、ヴェシュマに乗るのが得意なのだね。だから、こういった巨大なものにも興味がおありだ。そう、まるで機械巨人族のようだ。いや、混沌時代の巨人種にだってこんな大きなものはなかなかいないだろう」ようやく一番下にたどり着き、二人は上空の暗がりを見上げた。かがり火に怪しく照らし出され、それは邪神というに相応しい貫禄で立ち尽くしている。異常重力地帯のことであるからあまり驚くべきことではないのかもしれないが、海神の屍は吊り下げてもいないのに少し床から浮き上がっているようだった。

「いえ、僕じゃなくて」と、彼は言いかけたが唇を噛んで俯いた。「そうですね、少しは嗜んだことがあります」

「先ほど話したように」皇帝は歩き出して巨大な塩の殻に手を置いた。「ラースリュは敗北し、死んだ。それも、水の神に、ではない。…ふふ、こういうと、水教徒でなくとも地上のものは大体我々の作り話だと言うだろうがね。真実を司る女神メシャドも、その知性ゆえ時には捏造もやむなしとするのか――まぁ、深くは触れたくない部分だろう。いずれにせよ、我が祖先が中核である浸透の宝玉と海神の肉体をこうして新しく来るべき新帝国の象徴とすべく取り置くことができたのも、そのためなのだ。では、誰に負けたのだと思う？」

　彼は答えを期待せずに少年を見た。もちろん、相手は首を弱弱しく振っただけである。

「…ラースリュが負けたのは、自分自身なのだよ、親愛なる君。彼女は――そう、ラースリュとはこの殻そのものを指すのではない、その中に取り込まれた人間、海神教最後の巫女の名前。いよいよ海洋帝国が最期を迎えんというとき、彼女は星族に人工進化するための研究の第一被験者を買って出てくれた。危険な手術が幾度も施されたが、ラースリュ・ルクシュトは耐えた。おかげで今の我々がある。

　しかし、彼女の働きはそれだけでは終わらなかった。もはや復活が間に合わぬと思われた役立たずの神の肉体を我々の祖先は憎らしく思ったものだが、彼女は自らをその脳幹部分に生体結合することでこれを動かすことを提案したのだ。そして再び、手術が始まった。発生し始めていた脳髄を掻き出し、新しい有機的機械部位を取り付け、彼女の体細胞や神経細胞と連結させるデバイスを作った。とにかく大急ぎで、間に合わせ的なものだったから、本当に動くなど、ましてや真の神と同等以上に戦いうるなど、作った梵子科学者達ですら予想だにできなかったということだ」

「そんなに、強かったんですか、これ…」うーむ、確かにヤバそうだ、とカルツ・ピルスは腕組みしてふんふんと鼻を鳴らした。

「まさしくその戦いぶりは神というにふさわしいものだった。おそらく、これを遣わした闇に潜むケダモノが――無論、鯨族は滅びる寸前でこの巨大なモノが中央大陸から遣された、皮肉のつもりか鯨同様に陸生由来のものであることにようやく気づいていた。そのために我々は以後海洋信仰を未練なく捨て去ったのである――あのツァルツ神が予測した以上の、いや、真の神すら超える力をその結合は生み出してしまったのだ。

戦場となった海溝の水はラースリュの動きのせいで周囲に押しやられ、世界的大津波を引き起こした。水の女神をあと一歩というところまで追い詰めたとき、翼持つ風神が上空から援護の雷撃弾を放った。しかしそんなものは魔結塩には通じない」

『海流の異常攪拌のせいで風向が狂っちまってる。ザコにてこずりやがって、さっさと終わらせやがれメシャド！』などと何だかんだと理由をつけて駆けつけてきたキルケス神の台詞が少年の耳に聞こえてくるようだった。

「…しかし、ほんの僅かの偶然であったが、電気的信号がラースリュの脳神経そのものに小さな小さな信号を与えた。その結果…、彼女は、突如として戦闘をやめてしまった――」話し手はここで沈黙し、当時の情景を頭に描いた――メシャドは動かなくなった敵を破壊することは理念に反したのか、少女への憐憫を抑えられなかったのか、無言でその場を後にした。すぐに星者の母とも呼べる彼女が取り出されたが、まるで生きることを拒絶したかのように原因不明の昏睡状態に陥っており、それにはあらゆる医学的処方も虚しいものであった。

　皇帝は、この後にラースリュ・ルクシュトの『受胎』が判明し、意識不明のまま女児を出産したことは明らかにしなかった。以後、ルクシュト家は女系皇族とされ、代々沈星皇帝の近辺に仕えることとなったのである。しかしその代わり、『殻』については有機的機械部位が劣化した以外は頑健で、その中枢として少女の精神と機械生物を結び付けていた宝玉も健在であったことを話して聞かせた。

「このお飾りも、もしもラースリュのように宝玉の力を引き出すことができる者がいれば、もしかしたら再び――…それを知る者は我々代々のフリスロッツ家のみだ」彼は重大な秘密を打ち明けていることを少年に目で教えた。だが、カルツは鈍感さを遺憾なく発揮した目で困ったように見つめ返している。

「…しかし、ルクシュトの血統にあるものたちも、やはり血が薄まってしまうからなのか、無機質機関への完全なる共時的精神連動力を発揮することはできなかった」彼はこういってもう一度化け物の殻を見上げた。彼はまた、自分達の一族が実は、降伏を考えた海洋帝国期の皇帝をドサクサ紛れに殺害し、海神ラースリュをもって最後の抵抗を試みた科学者の一派であることも黙っておいた。それにこのこと自体は家系図を見れば詳しいものなら誰でもわかることである。だからこそ、色々と捏造した史書の効果も虚しく、星の辺境部族達の帝都に対する忠誠心はどんどん弱まっていったのである。

　彼の予測通り、史書では事実上最後の沈星皇帝とされるルスマール172世は、『とにかくこれがヴェシュマ開発のヒントになったことはいうまでもない』と話を締め、さてちょうどよく夕食の準備が整ったようだ、と背後の従者を顎で指した。彼は少年を通り過ぎ、先導して上に戻ろうとした。地上の連合艦隊が各地の部族を懐柔してマーナスに接近している今――海から天に来ても変えられなかった一族の運命に突き刺さろうとしている、大地のコの小さな小さな突貫に、何か、自分でもわからぬものを期待するかのような表情を隠しながら。

「――閣下、僕、一つ試してみたいことがあるんですが」

皇帝は背後からの顰めたような声を、神託のように重苦しい響きだと思って目を閉じた。そして背を向けたまま立ち止まり、先を続けるように促した。

「あの、僕の友人――あ、いえ、一つ優秀な機械があるんです。この宝石もその機械――えと、陽折牙のことですけど、二つとも閣下のものですから、…今まで理由もよくわからずに旅をしてきたけど、僕、最終的にはこれを本当の持ち主にお返しするために来たのかな、と思って、それが何となく嬉しいんです。

でも、もしもう一回使わせてもらえるなら、例えばなんですけど海神の操縦席…　あ、いや、頭脳の部分に、これを取り込めないかな、と思って…」少年は大それたことを言っている自分に大いに汗をかき、最後のほうはすっかりしどろもどろになっていた。そして、何か気分を害したのか、皇帝は相変わらず振り返らず、鯨のような大きな背中のマントを向けたままである。カルツ・ピルスは必死に話しを続けた。

「僕、自分でいうのもおかしいですけど、これをくれた皇女様のお墨付きもらえるくらいにけっこう変な力を出せたみたいで。あの機械も本当にすごくて、星の人達って本当にすばらしいな、頭がいいな、と思ったんですけど…」

「いや、そういうお世辞は全く君には似合わない」先ほどまで柔和だった皇帝が厳しい顔で振り返った。『ミャンレの話は軽率だった…』とカルツは思ったが、そうではなかった。皇帝はこの少年と最初に会ったときのことを思い出していた。

たとえ支配力が衰えようとも今まで決して踏み込まれることのなかった、聖域にも等しい恒星マーナスの無重力圏にたったの一隻で侵入してきたという船を、皇帝は興味深く思って自らの目で確かめるため、護衛艦隊にはあらゆる攻撃を厳しく禁じ、接舷した。

最新鋭の設備が美しいといえるほどに無駄なく配された管制室内には、地上種族の少年が独りでぽつりと立っていた。『我々が開発した陰折牙以上ではないか…　宮廷研究所の壁はどれほど水漏れすればその穴が塞がるのやら』と思いながら、皇帝は悠然と彼に近づいた。彼は後ずさりしながらもはっきりとした口調で言った。

「俺、逮捕されます。あなた達の宝石もここにあります。だからどうか、こいつだけは、この船だけは助けてやってくれませんか」

子供の冗談など聞いている暇はない、船員はどこに行った、とルスマールは思ったが、少年の目は真剣であった。彼は宝玉が本物であることを確認し、カルツがようやく目を覚ました陽折牙を自在に操って艦隊の後ろを付いてくるのを、何か恐ろしいような、それでいて望むべきと思われるような入り混じった感情で見ていた――

「――ピルス君。私は恥じなければならないことを白状する。…君という客人に、あろうことか我が国の行く末を押し付けるようなことを考えていた。だが、それは君の…」

「僕、閣下がミャンレのお父さんであるということを知って、すごく誇りに思います。閣下、恐れながらお願いしたいのです――どうかあの娘を赦してやってください。俺はあの娘のおかげで閣下に会えました。ミャンレは間違いなく閣下を愛し、誇りに思っていたのだと俺は今でも信じています。

　陽折牙の思考システム中枢って取り出せますか？　あとは配線の一本二本でかまいません。僕でもつなげます。梵子動力と思念系デバイスさえ…」

　何がための参戦、もしくはそれに偽した殺人衝動か――*キィフ、ミャンレ、ワナ、皇帝、血液、名誉、逃避、希望、劣等、神秘、意志、未熟、絶望、天性、漠然、努力、異常、*――以降は進まない工程、混ざり合って虚無と同価に――*常識という魔のコ――*突然雄弁になり始めた少年の瞳は、しかしどこか虚ろで、見ていると思わず引き込まれて黒い穴の中で磨り潰されてしまいそうだと沈星皇帝は感じた。それに比すれば、キィフへの千切れかかった、いっそ砕かれることを望む想いだけは、行動にある程度可視的な理由を与えうると言う点で、むしろ健全であったと言えるほどである。だから鯨者はわざと大きくうなづいて『君がそこまで言うなら、別に難しいことでもなさそうだし一つ余興にやってみよう』などといって話を強引に切り上げた。

　しかし、皇帝も少年も気が気でたまらなかったので、ゆっくり楽しむ予定だった食事も早々に切り上げ、科学者とも僧とも区別がつかないような、顔を頭巾で隠した人々を集めて作業を開始させた。カルツの見守る前で、空中に浮かび上がった陽折牙の装甲にガリガリとメスが入れられていく。カルツは眼を背けたい気持ちになりながら、聞いた。

『痛いかい』

*『いえ、ご主君。動力源は弱流循環措置を受け、思考系発報装置が止められているので本艦はほとんど何も感じません。しかし痛みとは…　そういうものではないのですよね』*少年は陽折牙が寂しそうに笑ったような気さえした。*『苦しい…　ということを想像するとしたら、先の戦いよりもそれが当てはまる事態もありません』*

　あの攻撃は随分強烈な一発だったもんなぁ、と納得した自分に、カルツは激しい疑いを持った。『なんだよ俺、陽折牙ほどには身近な人の死や別れを悲しんでいないんじゃないのか』

　二時間弱かかってようやく掘り出された陽折牙の中枢は、最も装甲の厚い船の動力部と近接した箇所にあったから、カルツのお気に入りの席がある塔楼とはちょっと離れていたし、頭上を見上げて命令するのも少々おかしかったのかな、とカルツは思った。だが、一度生み出された思考と精神的なものは形を持たず、それを発生させる物質や組織の周囲を取り巻いたり時には全く別の空間へ容易に遊離したりする可能性を秘めているのだから、どこを見れば正しい、とはならない。それはさながら原子の周りを共時的に同時並列で存在しながら回転している電子の場所を一点に定義しようとするような、実に不毛な考えなのである。

　カルツの機械の友人である『彼』は、小さな黒い箱のようなものだった。ほとんどが超高純度の展鉄でできているため、異常に軽い。まずそれを皇帝が珍しそうに触って各側面を見回した後、『よくわからん』といった顔で少年に渡した。カルツはそれが愛しい赤猫猫者の赤子のことであるかのように優しく抱きかかえた。

「やぁブラックボックス君」と少年が声をかけたので、*『ご主君、今まで通りどうか陽折牙とお呼びください』*と彼は照れたよう応えた。砂魚者はズボンのポケットに相変わらず無造作に収まっている宝玉と陽折牙の頭脳を持ち、皇帝に先導されて、かつて自分は海神ラースリュだと敵の女神に名乗った機械生物の胎のような場所に入った。乗り込む場所は頭部じゃないのか、と思ったが、従者の説明では、このイカのような巨大生物においては上の方が体で、足がついている胴体に見える部分が頭だということであった。

「さってと、なんか勢いでわかったような口ぶりしちゃったけど、どうしたらいいのかね」

*『そうですね…』*オイオイもう穿り出してしまったんだし責任取ってくれよ、とさすがの忠実な陽折牙も思わずにはいられなかった。

「すいません、時間をもらえますか。僕このまましばらく乗ってます。陽折牙と…　連結の素子が、デバイスの、ええと、今までの必要な機械部分がなくてうまくいかないようなんです、お互いに。でも問題ありません、慣れるまで、ちょっと…」

　ふむ、やはり暇つぶしにはちょうどよかった、それだけだ――皇帝は失望したというよりも少し安心したようなため息をついて、少年の申し出を許してやった。

――翌日、12月25日。といっても世界的に特別なわけでもないが、この日はミャンレ・ルクシュトの誕生日であり、また、この時代の誰かが覚えているはずもないだろうが、二度と目覚めることなく安楽死で他界したラースリュ・ルクシュトの命日でもあった。奇しくも真冬の吹き上げ雪空域中では雨や雪が沈星に対して横殴りに吹き付けたり、雲から上空へ上がっていくような珍現象が時々見られたが空域を舞うこの日、サディンカプル国境防衛軍を中心とする地上連合艦隊はマーナスの衛星キュオドの砦を圧倒的兵数によって占領した。しかもその中には、表立っては動けない地方星族から、密かに提供された多数のヴェシュマが含まれていた。

すでにこれを予測していたパムタヤー護衛艦隊の主軍にとっては、都督であった皇子を亡くしてしまったことや爆撃用の最新鋭艦が半壊したこともそれほどの痛みではなく、粛々と決戦の準備を進めていた。確かに多くの優秀な船が沈んだとはいえ、最強の空域艦隊として名を馳せ、地上勢力をその畏怖の下に鎮圧してきた海牛に乗る自分達が、蛸壺頼りの雑魚集団に負けるわけはない、いや、そんなことがあってはならないのだ、と皇帝が激を飛ばす。

「ああ、始まっちまう、どうするんだよぉ」部屋に戻らずに夜通し研究を深めていたというよりも、だんだん面倒になってきて眠りこけていただけのカルツ・ピルスは、出陣の勇ましい鐘が鳴り響いたことでようやく目覚めていた。*『まったく…まぁ、いつものことだ。こうでなくちゃご主君じゃない』*と陽折牙は微笑ましく感じた。

*『例え複雑に線でつないでも機械部分同士が連絡できるとは思えません』*

最近言うようになったよなぁ…　まさかバカなご主君を冷たく見捨てるのかい、と泣きそうな顔で少年は黒い箱を見下ろした。

*『本艦…　いやもとい、私と、ご主君共同で我々の交感を助けるその石の力を発揮しましょう。それしか方法はないと推測されます』*

「共同で？」

*『、二人で』*

『二人…』カルツはその表現に違和感を一瞬感じたが、それ自体が実に愚かしい自分の心の働きだと思った。「…そうだ、陽折牙。君と俺、二人でやる」

「来たな、化け物め」サパニ・キィフ・シュイラーダートは真紅の衣に身を包み、あの慧栖架を捨てて乗り込んだ、瑠気の冠をつけたエッセンシュトライヒェンに術の力を伝えた。これは、帝都の宝玉を欲するイグジエワド族からの密売品だったが、機体だけでなくサービスとして特殊武装がつけられた。術の力を増幅して伝える冠もそうだし、両腕に反射の盾を改造した『反射の篭手』を身につけ、さらには三発の麓楠を背中に隠している。

　彼女の前で、味方の船すら唖然とさせる圧倒的なスケールの黒く邪悪な姿をしたものが、城門部分を破壊して轟音とともに瓦礫を吹き飛ばしながら浮上し始めた。

「お前に似合いのヴェシュマだな、ミャンレ」とキィフは言って、すでに熾烈な艦隊戦が始まっている主力の前線を横回りし、後方からラースリュを狙った。

『怒れる腐竜よ、汝が身をも焼き尽くす喉奥の溶岩を、吹き付けるその反動を、私におくれ』

彼女は神女としての高等術法を増幅させ、エッセンシュトライヒェンに慧栖架のような滑空能力を付与しようとした。だが、その術経路は有り余る炎の使徒としての神気を吸い込み、ワナ・クヴァイのやったように、機体全体や両腕に握り締める加環から強烈な炎を噴出させ始めた。

「そうか、今、私は死神そのものになっているんだ」遠目から見ると不死鳥のごとく美しい夕焼けの色に染まっている自分を見ることができなかったから、彼女はこの不可思議な力が邪悪なものに違いないと決め付けた。

「ワナ君みたいには行かないわね。でも、私達、化け物同士の戦には相応しい」

「シュイラーダート殿！　慧栖架じゃないんだぞ。突貫するな、奴は我々がやる」とアルシュマイナーが彼女を掴もうとしたが、黒い手甲が溶解しかねない勢いに、近づくことすらできない。

「ローテンハイツ提督、船の群れはお任せします」とだけ言い残し、彼女は炎の軍神を代理する戦士の姿となって、海の邪神に躊躇なく戦いを挑んだ。

　だがその姿は、カルツ・ピルスには乗り手が誰なのかを知らせるものではなかった。

「なんだこの火吹き野郎、邪魔なんだよ、慧栖架はどこだ！」

ラースリュは圧倒的な広範囲への攻撃で、炎を身に纏った喰縞以外を全く寄せ付けない。しかし、新鋭飛空挺の頭脳を助けてくれていた様々な優秀きわまるセンサーやレーダーがないため、二人の力で本当にうまいことラースリュを動かせたのは良いものの、今や陽折牙はただの人間としての知覚を持っているにすぎない。*『優しいあの方のことだ、艦隊の方を護っているのでしょう。見つけたらどうされるおつもりです』*

「決まってる、この手で絞め殺してやるんだ。そうすりゃ俺のもんだろ！」

*『バカな…ご冗談を』*陽折牙の意思は戦慄したようにご主君を見上げた。

「ここまできてお前に嘘ついてどうするよ、俺はあの女とやりたかっただけだ。へっ、愛とかあるわけねぇだろ、世の中に。わかるか陽折牙。*この神通力…　俺のモノ、隠された才能…」*彼は目を暗く淀ませて口の端を歪めた。*「シミュレータゲームと同じ、オンナジダ…！」*

*『ご主君、好い加減にしてください！』*突如、邪神の動きが止まった。チャンスとばかりに周囲からうるさくヴェシュマやら船やらが撃ったり切りつけたりしてくるが、その装甲板には毛ほどの傷もつかない。

「陽折牙、お前こそふざけるな、動かすんだ！」赤い敵が単身、『壊れるはずの無い』魔結塩を加環の一振りで少しずつ溶かしていく信じられないほどの威力に、カルツは焦りを感じていた。

*『嘘だといってください、例えそれも嘘でもいい、私は信じたくない！』*

「アホ、嘘でいいくらいだったらどうでもいいんだよ、んなことは」彼は陽折牙を見捨てて自分の力だけで、邪神に備わっているであろう暗黒の力を手繰り寄せようとした。もともと動くことを望み、再び神として世界に実在することを望んでいた闇の機械生物の殻にとって、これほどありがたい干渉も他にない。カルツ・ピルスは石を取り巻くガスが黒く変色していくのを見た。

少年の心の振り子が、その齟齬を大きくして振り切れんばかりに揺れている。「ちぃっ…　。アイツがキィフだったのか」――*拒絶される理由を探していた。拒絶したいから。僕は何様だろうか*――そして、邪神の目だけでなく第六感までが彼の自由になった。彼は飛んできた麓楠を素早く感知して触手に当てさせ、全て爆破した。

「…かかったな。覚悟、ミャンレ・フリスロッツ！」

炎のエッセンシュトライヒェンが両腕にありったけの力を込め、筋肉のような金属組織が不気味に蠢く。その集積された烈々たる威力が加環に伝わり、円形の武器は溶岩の色となった。相対する少女と少年はこのとき一瞬、優しげな鋏が持つ小さな石を連想したが、それはすぐに記憶のかなたへ消え去ってしまった。それと同時に彼女は天高く飛び上がり、加環を一直線に振り下ろす。邪神が放ったいくつもの触手が一度に分断されて吹き飛んだ。

「いってぇ、やりやがったなぁキィフ！」その声は邪神の感応力によって直接彼女の耳元で響いた。思わず雪聖の娘は飛び退って棒立ちになる。

「カルツ君！　…そうだったの。もうやめなさい、そんなものを出しても私には勝てないわ。あなたが戦うべきは、あなたを操っている悪魔の娘よ！」

「悪魔か…　けっ」彼は唾を吐き捨てた。邪神の魔の手が彼の心臓を掴み、*『あれに勝てば、貴様は世界一のオトコだ、世界一のオトナだ。皇帝も、ワナ・クヴァイも、提督も、陽折牙も、決してお前に敵いはしない。だからコロセ』*と伝えてきた。彼はその話を聞いているのかいないのか、いつものボンヤリとした眼差しのまま、憧れの人だった少女が乗る機体に対し、体中から揖保のように突き出た砲座を全て向けた。

「はははははははっ、わかってないなぁキィフ、クヴァイ君を殺したのはこの俺！　ミャンレは全然関係ない。あの娘は良い子だよ、俺なんかにはもったいないほどに。だから追放してやった。…悪魔ってのは俺さ、だからこうして邪神の中にいるんだよ」

「嘘ついたってダメ！　私にはわかる、カルツ君目覚めて」キィフは爆炎を障壁にしてラースリュの無差別的な凄まじい暗黒弾砲撃を防いだが、彼女の周囲では帝国も連合も無くヴェシュマや船が次々と被弾して堕ちていく。

『…信じなくちゃいけないんだよね、ワナ君。見て、アタシ、信じてるのよ。

だからもう、嫌いだって言わないで…』

彼女の周囲の空気が燃えはじめ、巨大な炎の輪のようになった。これが様々な角度で数を増して出現していく。

「私の力じゃない…　ワナ君なの、護ってくれてる。そうよね、そうでしょ！」偉大すぎる力を付与された戦士は、己が力をもはや持て余しているようだった。彼女が望む望まぬにかかわらず、あの闇の神ですら捻じ伏せて切り刻んだ最強の戦闘力が顕現し、火の輪が次々と爆撃弾に変異してラースリュを燃やしていく。

*――僕は行く、カルちゃんと一緒にどこまでも――*キィフの耳に真の愛を象徴する声が響いた。「違う、やってるのアタシじゃないの。わかんない、止まんないのよ…」

*――愚かにも水神が残してしまった巨大な暗黒と聖那を脅かしかねぬ邪熱。*

*今こそ汝等の砕けるとき――*

――火山の奥深く、その第一従者すら近づけぬマグマの中に漂う火神の思念体が、この戦の光景を黙って見つめていた――*朕の威力を娘から強制的に引きずりだしている奴がおる。汝だけが世を照らせるのではなく、概念の寒暖を区分けする明晰は総じて達せられていくべきなのに。闇、いや…――光め…！*

邪神の力も常軌を逸しているが、炎の小さい姿の貫通力がゆっくりと押し始めているように見えた。周囲の敵味方もこれでは自分達の戦闘の小ささがどうしようもなく鼻についてしまい、一時休戦とばかりに互いに安全なところへ退いて決着を待っている。

しかし、『…もう嫌。ワナ君、アタシ、あなたの傍に行く。もう今すぐ行くんだもん』サパニ・キィフ・シュイラーダートは慧栖架のとき同様、再び操縦桿から手を離してしまった。かつて、ラースリュ・ルクシュトが小さなきっかけでもう一人の自分に気づいてそうしたときのように。

――マァマ、めしゃどママ。アタシ、アタシね、ママのこと大好き――

『なんでキィフまでママとか言ってんだよ！』砂魚の少年は自分の機体がほとんど制御できないことに戦きながらも、必死に攻撃をように念を集中させていた。

*『ご主君、キィフ様はかけがえなきご友人ではありませんか。そうか、やはりワナ様を討ったのもあなただったのですね、この人でなし！』*黒い箱が、何か全く彼の知る陽折牙の声ではなく、反転したように叫んだ。

「ああそうだ、今更何言ってる。俺はそれでも勝手にお前を友人だと思い続ける。お前は俺を見限ってどこへなりと行っちまえばいいさ！」彼は滅びるのがラースリュの肉体ではなく、多分かつての水中戦同様、脳髄に当たる自分だけだろうと直感していた。陽折牙なら、拾われて間違いなく何かの役に立つだろう。それより――何してる、早くやってくれ、俺を憎んで殺すんだ、キィフ。時間がない…――

『カルちゃん、違うよ。君が勝つんだ、ほら、ヴェシュマってのはこうやるの』カルツははっと振り返った。…誰もいない。その隙を突いて小さな触手が手前の方から突き出てきて、ちくりと彼の手に刺さり、ずぶずぶと侵入していく。

　突然、邪神の胸部に二つの大きな穴が開いた。そこに、何か得体の知れない力が渦を巻いて集中していく。

「ワナ君どうしてそっちにいるの。ひどい、私もそっちにいく！」敵の内部に渦巻く思念や魂の映像すらもサパニ・キィフ・シュイラーダートには他の物質同様にはっきりと見えていた。真っ赤な法衣を脱ぎ捨てて下着姿になると、雪聖の娘は操縦席の蓋を開けようとした。だが、己が高熱で圧着してしまったらしく、どうやっても開こうとしない。

「嫌、嫌！　出して、こっから出してよぉ！」

『く、キィフ、ワナ…』

カルツ・ピルスは自分の脊髄と樟脳を束縛されてしまったことを、まるで陽折牙が画面上に損傷信号を掲示するようにはっきりと感じていた。目の前で双つの充填メーターが上昇していくのをどうすることもできない。

『君はすごいんだ、カルちゃん。俺、君と一緒にどこまでも行くよ』聴き慣れた声が、虚しく抵抗を試みる少年の張り詰めた神経を麻痺させていく。

「…ワナ…　君、まさか俺のこと、許してくれてるのかい…」彼は押し出すように呟いた。

『当たり前じゃないか。ていうか、何言ってるのかワカンナイゼ、カルチャン。オレタチズットナカマダロ。ソレニキミガワルインジャナイ、アレハミャンレガ…』

「そっか」全てを委ねた様にしてカルツは背もたれに体重をかけたが、すぐにかっと眼を見開いて操縦桿代わりの太い触手を握った。「…見え透いてるんだよ、クソ妄想め」

彼の手に突き刺さっていた邪神の神経索が、ブチブチと音を立てて各所で千切れ、カルツの体細胞に逆に喰われてしまった。神のごとき巨大生物にすら理解できないこの現象も、四億年前の戦いの再現のようであった。

――バカナ。キサマ、モシヤ、ラースリュ…?!――

「そうじゃねぇよ、どいつもこいつも…　俺だ俺、このカルツ・ピルスが、今天空の頂きに君臨している！」

*――主砲発射可能――*と、彼は懐かしい宝船の声を聞いたように思った。彼はその砲座を体内で下方向90度回転させるように自殺的な思念命令を送る。『ワナ待ってろ、今いく』

――あ、ワナ君――

押し寄せてくる黒い濁流の先陣を切って、白い翼をボロボロにした少年が泣きながら飛んでくるのを、雪娘がはっきりと見ている――ン、痛いのね。大丈夫よ、私がずっと、癒し続けてあげるから。抱っこしてずっとずっと――

　ガーンと思ったよりも乾いた響きを立て、二本の暗黒エナギー砲が発射された――音を、カルツ・ピルスは聞いた。

「…き…」彼は一瞬呆けたような顔付きになったが、すぐにガタガタと震えて操縦桿を放し、頭を抱えた。もはや眼前に雪娘の機影は無く、僅かな塵の他は空虚感だけが漂っている。

「キィフ！

う…　うわぁぁぁぁぁあああああああああああああああああああああああああ…」

*『…作戦成功』*

ほんの一瞬、ほんの僅かの差であった――早く砲を打つように命じたモノ、少年自身の抱える黒い塊を、彼はハッと見下ろした。

「お前…　おい、陽折牙…　キミ…

いや、アンタ、俺の良心なんだろ。俺が悪魔の心なんだろ？　…なぁ、どうしたよ、いつもあんなに饒舌じゃねぇか、なんで応えない？

　なぁおい、冗談はやめてくれよ、友人だろ、お前だけは俺のホントウノトモダチニナッテクレルんじゃなかったのか?!　なぁ、応えてくれ、応えてくれよぉ陽折牙ぁぁぁ！」

　――だが、ブラックボックスが話をすることは、もはやなかった。動かなくなった巨神の姿に、復讐心に侵された男が怒号を上げ、磁波の群と数千の兵士で喰らいついてきた。表面の装甲が炎によって若干溶かされていたこともあり、無数の蛆虫に集られたようになって、さしもの硬質な殻もガリガリと少しずつ削れていく。

「痛い、痛い、いてぇ、やめて、やめてくれ、痛いってば、痛いよぉ！」操縦席の蓋を開けなければ、そうすれば一思いにやってくれる、と彼は全身を蝕む激痛の中で必死に内壁をまさぐった。「…中からは開けられないのか、これ…　うぎっ――」

　邪神に取り付いた兵力以外が帝都の戦艦を次々と撃沈していく。沈星帝国軍は兵器の質だけは上だが、兵士達の操縦技術における敵味方の格差が誰の目にも明らかであった。星者の予想を上回って、地上種族の体細胞が学習する戦闘の勘というものの成長速度は素晴らしいものだと、皇帝は半ば感心して思わずにはいられなかった。

「脳細胞にのみ頼った我々のツケか…

すまなかったな。…やはり止めておくべきだった、ピルス君」

　彼は旗艦から小型の脱出船を発し、昨日客に見せた宮殿のさらに地下深くへ潜っていく。そこには、少年達が無邪気に、そしてどことなく不気味なものに引かれながら空虚に求め続けてきたものが、在るのだった。

「――これが、この無数にピカピカ光る機械そのものが、真珠だっていうの。昔の人って――やっぱりセンス悪いわね、お父様」広大な穴倉の壁に取り付けられている巨大な梵子コンピュータを操作していたルスマール172世の背後に、彼の義娘が近づいていた。ミャンレは失意の中で戦況を眺めていたが、カルツの敗北を見て「哀れな奴ね」と呟き、心の中ではいつものようにその正反対を思いついたのだった。『彼のように、最期に何かできるかしら』

「ミャンレか…　お前ならここがわかるのも当然だな。ふふ、そうだ、お前のボーイフレンドに伝えてくれと言われたよ。お前のことが好きだ、とな」

彼は、初めてミャンレを受け容れたときに見せた優しい父の眼差しで彼女を迎えた。

「もう、お父様ったら嘘がお上手。でも嬉しい」彼女は小走りにきて皇帝の胸に飛び込んだ。

「お父様、お父様――堕とすのね、星を」娘は、大きな胸に顔を埋めたままで聞いた。彼女は陽折牙を離れてから別荘に潜み、ずっと様子を伺っていたのだった。

「ああ。極力この手は使いたくなかったが、こうなっては仕方あるまい。

我々の作り出してしまった科学力は、いつしか生み出した我々の一族にとってすら脅威となり、結局はこうして自らを滅ぼすことになった。ラースリュなどではない。この力こそが賢き我が娘よ、邪悪の力そのものなのだ」彼は機械の操作盤に向き直って、沈星の核活動を停止させるスイッチを一つ一つ漏らさずに押していく。

「もしも我々がこの電脳機械をスターコアに設置しなければ、沈星という曖昧な空層を地上が見ることも無く、異次元から出現した流星群によってその瞬間に世界は終わっていただろう。天空神のご意志に従い、滅びを通じて天に召された当家はこれを決して世界の誰にも渡さぬよう、あらゆる勢力を平服させねばならない宿命だったのだ。だが、それがもう不可能になった以上、全ての人類が滅びなければ、結局はいずれの日にかこれを悪用するモノが現れよう。同じことなら、無い方がマシなのだ」彼は、まるで邪神に身を委ねた少年を髣髴とさせるかのような、ぼんやりした表情でそう言った。

「本当ですわ、お父様。いつもお父様のおっしゃることだけは正しかった」

　皇女がその背から抱きついて目をうっとり閉じる。「…私、ご褒美が欲しい」

「ああ、今日はお前の誕生日だったな。では愛しき娘よ、約束しよう。全てが終わったら、どこか残った島にでも行って二人で暮らそう。長く生きることはできないかもしれないが――死んだ妻のようにお前は、よく私に仕えてくれた。これからは何でも言うことを聞いてやらんと。それに、謝らねばならんな。私ともあろうものがバカ息子達の噺を信じてしまうとは。あの砂魚の少年が最後にきて私の目を覚まさせてくれたのだ」

「ううん、言わないで、そんな*ことが何だというのお父様。私、今がすごく幸福よ」*

　皇帝は娘の声が後ろからではなく機械から響いているような気がして目の前を見上げた。

「…ミャンレ…　お、お前…」

星の大柄な男は振り返る力も無く膝から崩れ、操作系の台座に腕をついた。彼のマントに付きたてられた短刀の周囲に透明な体液が急速に染み込んでいく。

「謝らなくちゃいけないのは私の方。…いっぱい人を殺してしまったの。ワナも、キィフも、カルツも…　でもお父様、この最後の殺人だけは、私がお父様の命を受け取ることだけは、お父様のためになると私、信じてる」

「…ああ、すまんな。血の命令だけは自分で止められぬ。

あ…　りがとう、ミャンレ…」微笑んで彼は頭を台座にぶつけ、そのまま床に落ちた。彼女はその目を閉じて頬にキスしてやり、「お会いしたことないけど、お義母様の夢でもみてね。さようなら、大好きよお義父様」と言った。

　そして、最初に新鋭飛空挺の頭脳を操作しようと四苦八苦したときのように、梵子コンピュータの制御パネルを見回した。「どれ、どれなの。急がないと堕ちはじめる」

*――ここよ、ここ、ミーちゃん。このたくさんの赤いスイッチ全部――*彼女の頭の中で、最後の最後にようやく統合できたもう一人の自分が優しく教えてきた。「これが爆破スイッチね、ありがとう。ごめんね、アンタをバラバラにしてしまって。でももうずっと一緒だね、アタシ達」

彼女は、核停止装置のすぐ隣に小ぢんまりと設置されている、硝子で丁寧に封印された各沈星の瞬間的な重力圧縮を促すそれらをパチンパチンと音を立てて破ったので、見る間に指先が血だらけになっていく。その装置は、共存可能人類が『自己消失＝世界滅壊』と定義した方程式に対し、自ら密かに用意していた相反する尊ぶべき解であり、その揺らぎに明確な傾きを示す答え合わせができるのも、彼らの一族のみであった。*――最後まで操り人形なんかじゃない。これでいつか、誰かが私達を物語れる――*そして彼女は、マーナスのボタンを押した。

　地割れから吹き上げる溶岩に飲み込まれながら、ミャンレ・ルクシュトはそれがキィフの怒りに代わる復讐の火と連想したが、くだらない空想だと思って首を振った。「あのコそんなことしない。もうワナと一緒くたになって神様と区別がつかなくなっちゃってる。でもアタシは、カルちゃんトコに戻れないんだ。*ある意味では正しくとも、罪は罪だから――」*

有毒な煙によって意識がなくなるのをできるだけ長く防ごうと、彼女は布を口に押し当てて酷く咳き込み、ゆっくりとその皮膚を激痛の中で焼いていく。――*天国なんか嫌。カルちゃんみたいに苦しんで死ねば、同じ地獄にいけるかも*――『もう一人』も何かを言い遺した――*ねぇ、最後の呪いをあげるわ。あなたは孤独だと思っていたんでしょうけどね。知らないだろうけど、私は本当にあなたを愛した。この真実だけは変わらないわ*――

「退避、退避、全軍退避！　どこの国の発着所でもいい、降下しろ！」

ローテンハイツ提督の声がブルカス号から響き、連合艦隊の残存勢力は先を争って近くのヘルマロロ公国などの打ち上げ機を目指す。だが、それも限りがある。最強の護衛艦隊に上空を押さえられていたこの地域の地上軍はそもそも戦意などほとんどなく、交易用のものが少しあるだけなのだ。たちまち味方の船同士で醜い共食いが始まった。

ところが、あれほど争いあっていた元鯨族の星者達の勢力は、自分達の世界が消滅していく中で、ただの一人も地上などへは逃げようとせずに黙って目を閉じていた。兵士、民間人、老若男女問わず、その場で来るべき運命に敬意を表し、胸の前に拳を置いて天の神に祈りを捧げる。沈星の表面に赤い亀裂が幾重にも走り、神々しくさえあるその潔い星の人類の姿を、空中分解の衝撃波が包み込んでいく*――繰り返すべからず。我ら善き死を求めんと天空に来たれり――*それとともに空域を形成していた異常重力が薄らいで、『普通の』状態に戻っていった。それは、この場所に留まっている者にとっては確実な死を表す。

　逃げ遅れた船が、爆発で燃えきらずに飛び散った沈星の破片が、人の肉片が、のうのうと地にへばりついて生活を貪っている人々に『ほら、私達は死んでいく。昼ご飯なんか食べてないでよくみてごらんよ、こうやってしっかりと死んでいくんだよ！』と語りかけるように次々と地上に落下していき、時には何も知らない彼らを巻き添えにしたりもした。

「おお世界の終わりだ」と、星が沈んできたときと同じようなことを口走ったものも少なくない。このときばかり利用するがごとく、神様の手にしがみついて適当な祈りを発明した者も――しかし、冷凍乾燥保存されるようにして形を取りとめていたあの小さな蜂の死骸、すでにして少女に殺されていたモノだけは、本当に嬉しそうに、海の巫女に感謝しつつ、気圧で崩れながらも地上世界へと還っていくのだった。

戦後処理の一環としての軍事法廷にて、有罪判決が下されたカルツ・ピルスに残された時間は、およそ半月らしかった。ギロチンでやってくれるらしいという話しであったから、もう彼はその日が待ち遠しくてたまらなかった。目に見える傷がないにもかかわらず、損傷信号の嵐によってほとんどの筋組織が使い物にならなくなり、僅かに身を起こすだけでも激痛が全身を駆け抜け、老人のように震えなくてはならない。牢獄に穴を用意してもらい、下の処理はその上に寝転がっていればよかったのであまり苦労は無かったが。

何という痛みだったろう、と彼は灰色の天井を見上げながら懐かしそうな表情で思い出した。*――痛みとはそういうものではないのですよね――*いや、君、意外にそういうものなのかもしれないよ。いずれにせよ、喉もと過ぎると思いのほか大したことがない。

この上さらに毒で苦しみのた打ち回りながら…、って奴だったら本当にサイアクだった、と彼はほっと一息ついていた。邪神を動かして高司祭を殺害した罪状への罰は普通に言ったら磔の上に市中引き回しといったところだろうが、おそらく彼が少年であることを考慮に入れてもらえたのだろう。

カルツは腕をだらりとさせて毎日支給される粥をお義理で少しだけ舐めてやり、時間をやり過ごした。それは陽折牙の中で暮らしていたあの自堕落な一時とあまり変わるものではないと彼は思った。餓死して死んじまったらあいつらムカツクだろうからな、せいぜい生きて台座に出演してやらないと、とも。

あの物言わなくなった黒い箱はもはや取り上げられて粉々に砕かれてしまっていたが、その代わりといってはなんですが、と一つだけ大人達に頼んだものを彼は首尾よく手に入れていた。あの読みかけの、というよりもほとんど読まれていなかった大作の小説である。それは宮殿内に無造作に置かれていたリュックサックに入っていて、ある兵士が略奪しているときに偶然拾ってきてくれたのだった。多少煤けてはいるものの、文字さえ読めればこの紙切れの束は決してその価値を失うことはない。その力は時として彼の手にしていた秘宝のそれをすら上回ることがあることを、彼はぐんぐんと読み進めながら実感した。

ところでその『浸透の宝玉』も、いまや世の中に存在していない。海中に邪神の殻が堕ちて数日後、漁船から連絡を受けたサディンカプル軍の船団が、ぷかぷかと浮かんでいるそれを囲んだ。そして少年を引っ張り上げた後に彼を調べたが、石はどこにもなかった。それとは別に小さな屑石の破片をいくつも彼は持っていて、『これが、それです』と言ったが、誰も信じず、よくわからない邪神の宝玉などに興味も無かった人々は問題にもしなかったようだ。そして、術師団による死骸に対する集中砲火が行われたが、いくらやっても大した傷にもならない。そこで仕方なく、中立を決め込んでいた水の都から雪聖の術者達を借りてきて、浮力を失わせる共同儀式術を行わせ、海中深く沈めた。

　――頓挫していた少年の『もう一人の自分』が求めていた仕事は日に日に勢いを増していく。呼吸するよりも早く読み進め、それでいて一字一句漏らさずにかみ締めていく。理解できない難しい表現も多くあったが、まずは気にせず最後まで読んで、もう一度じっくり読み解いていくのも面白そうだ、と彼は思った。

しかしこのペースであろうとも、彼に残されたあまりにも少ない時間を逆算していけば、一周目のゴールに到達することすら全く不可能であろう。至極残念なことではあるが、しかしまぁ、最後の方は色々と予測できるし、同時に全く筋が予測できないような気もする――彼にとってはこのように、色々と空想して自分なりに物語を頭の中に思い描いてみるのもなかなか楽しいことであった。読めないということすら今や彼にとっては有意義であり、そのときは決してこないのだが、『以後、さらにこの本が必要になるときが必ず来る。そのときまで取り置いておこう』と自発的に思われたりもした。

このような強い相互観念干渉現象を生み出しているこの書物は、しかし全く自分のペースで物語を進めているだけである。それでいてこの本――いや、『彼』は、厳しく優しい父親のように、そして統べての理をよく知っている寺子屋の宣教師のように、直接手は貸さずとも、よたよたと追いかけてくる少年のことを背中の瞳で微笑ましく観ながら、『おいで、おいで、君の目をしっかと開けるには、よくよく自分で歩かなくっちゃあいけないよ。さ、俺と一緒に』と声をかけ続けるのである。それは時折幾つかの優秀な人間に啓示を与える神の声にもよく似ていたが、この本はしかし一個の人間に書かれたにすぎぬから、決して差別などせず手に取ったものなら誰にでも一所懸命に心を開いてくれる。

彼は黙って、のんびり生きる主人公に自分を重ねたり対照させたりしながら読んだ。そして、もし自分がもっと早くこれを読んでいたら、と胸を熱くする。その言葉、文章の量、そして無論――他の追随を許さない確固たる構築技術。その職人技はしかし、単純な修行や学校の教えで学び取れるものではなく、全て無から手作業で見出すか、先生をすら自分で創り出して死に物狂いで会得せねばならぬ。

例えばそれは書こうとする者自身の抱く知識量と読者への想いであり、芸術を創っていることへの誇りであり、そして作品の親としてその完成のため喜んで命を削って与えていくことへの喜びであっただろう。しかし、それでは苦労すればいいのかというと、…今度はそうでもないというのだ。まるで梵子を指でつまもうとするかのごとき不可能作業を、有限な能力を持つ人間が、なんとしても成さねばならぬ。ああ、もう辞めたい、と思えば、彼の胸中で湧き出す声がある。『誰がお前などに頼んだ。辞めれば良い、役立たず。そしてお前の水子達が親を呼ぶ哀しい泣き声に耳を澄ますが良い。そのコを読んだコが生み出す作品の、さらにそのコ、またさらに…と、永劫繰り返すはずだった虚しき輪廻をここで止めるが良い。彼ら全ての嘆きを一心にお前が背負うのだ』

――…Scheiße、誰が、てめぇ何ぞの指図を受けっか――著者の中で沸々と湧き上がる反抗心と、それに引っ張り出されるように頭をもたげてきた、無限の愛情――『俺は、アイツらが可愛くて愛しくてたまらんだけだ。だから書く。書いてやろうじゃねぇか――』

「ちっ、俺は何を今まで読まされていたんだ。そして、今、何を読んでいるんだ」とカルツ・ピルスは思った。そこには、淡々とした日常のようなことが事細かに書いてあり、時としてあからさまに啓蒙主義的な論調に変わったりもするが、どうにも不気味に感じられてしまい、本を閉じさせ、休憩しなくてはならないことが多々あった。――そこには、読者である自分についての事実が、ありのままに書いてあるような気がしてならなかったのである。

運命という舞台裏に潜む、不気味ななモノの確実な存在。それを信じて破滅するもの、無視してのうのうと生きるもの、偶然克服して強くなるもの、その横を興味津々で通りすぎ、メモを取る記者としての著者自身さえも、語り手として見えざる席に出演している。

しかし、この本の主人公だけは、どの勢力にも組みせず、流れるかと思えば強く踏みとどまり、弱い凡俗の青年かと思えば誰よりも賢く振舞うこともあった。彼はしかし、ただの一度もカルツのように激昂したり、殺人を犯したりはしなかった。いつもその寸前で綱渡りを行い、まるで軽業師のように踏みとどまったのだ。

著者は日々を克明に描くかと思えば突然数年を数行に換えてしまい、自由自在に高位時空術を振るうようにして書き続ける――どのように主人公が生きるにせよ、私も君も、彼のごとく生きていくしかないこと、運命がそれにどのように干渉するか、もしくはそのように見かけ上、共時的に見えるか。しかしこの難しさの中でも我々は、決して足を踏み外してはならない。これが、我々の『責任』と『良心』の定義なり――こうしてただの文字の複合によって世界の真実が暴き出され、答えはないその問題に、真摯な態度が示されていく。

『――書くもの書かれるものは一個の連結素子である。文学作家などは、忠実なる歴史の書記にすぎない。高次的世界と時代の意義を時空を越えて抽出し、わかりやすく、面白く、わかりにくく、すなわち意義そのものであるところのめまぐるしく変動する神の概念に類似した手法を模索しながら、しかし絶対忠実に再現せねばならぬ。

そのような低い身分を持って初めて、彼らは真にその職を得たと言えるし、この瑣末なバッヂについて、多少は喜んでもいいのだ。なぜなら他のあらゆるものにはまっとうな仕事など与えられていないのだから…【中略】…全ての愚昧を払拭した私を卵黄嚢の皮としか見ない、真実の稚魚達が蹴破って世界を導いていく」こういった、他人の反感を引き出すしかないような仙猫猫者種の英雄や賢者のことの言葉を、ジューガクの小説に登場する教師的人物が、『化猫の49の溜息作家を目指しながら一作も仕上げずに死んだとされる三賢聖の一人ウムポ・ルサの草稿をその息子が編集したもの。完全な原本は残っておらず、訳者によって解釈が様々』という書から引いている。こういった内容は勉強になるし、まぁ、面白い、とくらいに少年の読者は思った。今はよくわからない、でもいずれ『仕事』に必要になる、と考えた自分に首をかしげながら。

　だがカルツは、やっぱり自分はこの登場人物達のいずれでもない、詰まるところ、自分という個体はこの本によるとある種の弱弱しい稚魚であり、ずいぶん頑張って逃げ回ったけれども、結局は何もしないのと同じことになってしまったのだ、と最終的には考えていた。対してこの長編小説の主人公は人生の矯正を試みる周囲からの干渉を受けつつ、生を死に優越させる決意を無我の中から、自分の言葉で見出したことをこの小さな読者は感じたが、『でも僕にはそれ以前にやらなくちゃいけないことがあったんだ』と思った。彼は、まるで『沈んだ星』のごとくに空想的な、蒸し暑い密林の水飛沫に架かった夢幻の橋と、そこに住んでいた大柄な人々を思い出す。

――善いものを自然と選別して享受する、善い人間であること――

「君こそは、まさにそうあってほしいんだ」

彼はミャンレのことを思い出している――僕の見なかった、僕の屍が埋めた方面の全く正反対を、どうか君はしっかりと護ってください。その道は、僕のコであり、誇りなのです。

少年の死刑囚はある朝、時間が経ちすぎていることを感じた。いつ執行されてもおかしくない、止むを得ないな、と彼は中盤を読み飛ばして後半に入った。すると彼と主人公は別人でありながらどこかで重なり合う部分が増えていき、この辺りまで来ると感性は相当の一致を見ていた。だが、やはり生きている時代や社会性が全く違いすぎる。そこで、カルツは速読しながら印象を手早く自分の頭の中に劇のように空想し、自分が短い人生の中で見てきた様々な部品を当てつけて補足し、漠然と理解するように努めた。

『――どうして、こうまで何度も歯車の軋みが繰り返す？　自己とは、愚かしき試みの輪廻を自分では止められぬ自動機械、と主人公は泣いた。そうではない、と物語りは告げた。これこそは正しき場所にし、通常の生き方では決して辿り着くことのできない真実の道へとするための善なる努力なり。お前達は見えないように時空の壁に隠されている配管を、お前達が見なくてもすむように配慮されているそこに、酔っ払ったように、何かを探している振りをして穴をぶち開け、真実の一端を垣間見た気がしているだけなのだ。そこに醜い何か、他の愚か者達が気づかぬ薄汚い管がいくつも這い下っているのをみたところで、お前達はその全体の何かを知れるのか。そこの一本を苛立ちまぎれに引きちぎったところで、全体の改善ができるのか。そもそも神の意思の改善とは？――あり得ぬこと。

しかしそれにも拘らず！　こっそりと、恥ずかしそうに穴を埋めるお前よ。ああ、お前よ！　もう少しだったのに。それでもお前だけは決してあきらめてはいけないのに――』

僕の存在も、その中の一つなのだろうか。僕はあきらめたのだろうか*――否。お前の戦場、すなわち沈思し続けたお前の命に代わる文章を、いずれ、誰かが見るだろう――*…あ、そっか、こんな単純なことにどうして気づけなかったんだろう、やっぱバカだぁ俺。

ねぇ陽折牙。お前、この本でもあったんだよね。やっぱお前は、ずっと俺と暮らしてきてくれてたんだ。親が俺を見捨てても、友人が俺を見捨てても、他人が俺を見捨てても、お前だけは一緒でいてくれる。今も。すっかりくっついちまっていて、それで喋んなくなっちまっただけか。

――じゃあ、アノ時、アレやったの、誰だよ。　…サクセン…？――

彼は、天井を強く睨みつけた。その裏に隠れる空間を見透かしたようにして。――なぁるほど。誰かマダ、ヒソンデイルワケダ。

ウマイコトヤッタトオモッテルダロウガナ、イズレテメェモ、カナラズサバカレルゾ――

――――

『の定義を社会上で目立つモノの代表格であるという認識と同一にさせておく限り、其は永久に不治の病であろう』

　主人公が感動の涙を浮かべてのんびりと音楽に聴き入っているとき、再び仙猫の言葉をお説教がましく教師役の男から聞かされたので、すっかり気分を害してしまった――というシーンに差し掛かったとき、まだ飯の時間でもないのに、二人の男がどたどたと囚人の部屋に入ってきて、少年の骨と皮ばかりになった腕を掴んだ。「…時間だ、ピルス君」

　彼は『そうですか、どうもゴクロウサン』と言ってやろうと思ったが、もはやかすれ声さえ出すのも億劫であった。こんな状態であったから、砂魚の少年は担架に寝そべったままでその項を真上の鋭利なものに差し向ける格好を取らねばならなかった。背後から、聞いたことのある声がした。

「…カルツ・ピルス。本来なら、…私自らの手で焼き殺してやりたいくらいなんだよ。だが、こうして君の事を少しでも慮って、あの人のかつては友人であったということも考えて、たった３人で、君の名誉を傷つけぬように、と…」アルシュマイナー・ローテンハイツの声が震えていた。ということは連れてきた奴らとアンタだけか、この部屋、と少年はこともなげに思った。『ウゼェ大人だ。ま、いいさ。取り決め通りにやってくれよ』

――カルチャン、アタシ、ミエナイ。ヒドイヨ、マダシンデナカッタナンテ。ドウセアタシノコトマタキライニナッテ、ヒトリデイイトコニイクキナンデショ――

　彼は首を上げて、目の前に蠢く悪霊を見た。『うわ、死ぬ前にこんな怖いの見なくちゃいけないなんて。サイアクだ』と彼は嬉しさのあまり引きつる顔を震わせた。その真っ黒に焼け焦げた小さな姿は、爛れた皮膚を不気味に引きずりながらカルツを捜し求め、あっちにふらふらこっちによろよろしている。

『ったく、せっかく逃がしてやったのに、俺の願いも叶えずに、恩知らずもいいトコだ。気色悪いったらないぜ、ミャンレ。鼻水女め』と彼は思った。

――最後の最後に来て、神様ってのを信じれるような気がする。だって、この俺の、自分でもよくわからなかったような複雑怪奇な女の好みを、ちゃんと誰かさんはお見通しで引き合わせてくれるんだモンなぁ――

「――ねぇ提督さん」

彼は喉を木枠に押さえつけられながらもありったけの声を振り絞った。

「アンタ、キィフの許婚かなんかスか？　違うっすよね。逆恨みもいいトコだ、はは。俺、アイツの本当に好きだった人を知ってるっスよ」

「何、貴様…」足音がずかずかと近づいてくる。

「俺の親友」

ガッ、と狂気の顔をした男が彼のばさばさになった髪を掴んで首を持ち上げた。「何言ってやがる、おめぇはこれから死ぬんだぞ」

「…俺もお前も、哀れなオトコさ。憧れの人に一瞥も受けなかったに等しい」砂魚者のは囁くように言った。「なぁ、ホントにこんなバカな単純機械に任せちゃっていいの？　*…悔しくねぇ？」*

『死の焔に、復讐の儀式あり』戦士たるもの敵をも知らねばならぬというわけで学んだことが、提督の頭にぐるぐると渦を巻いて浮かび始めた。彼はもう、腰布に挿している小鋸刀を掴んでいる。「君、しかし…　私は、愛している、今でも彼女を」

*「そんなことじゃダメだなぁ。前にいけないぜ。さ、好きなようにやるんだ、なるだけイタムヨウニシテくれよ」*

　のの魔性が、梵子を介さず、無から幾度となく搾り出される――こうして本人によって合理的に承認印を貰ってしまったので、アルシュマイナー・ローテンハイツの欲望と破壊欲求は良心の堤防を決壊させ、濁流となってその体を自動機械のように駆け巡った。「キィフの御魂を救うため、聖なる教えと聖女のためぇ！」などと整った顔を狂った喜びでぐちゃぐちゃに顰めながら、敵対する暗黒の信仰に彼は身を委ねてしまった。

『カワイソウ、コイツら』とカルツ・ピルスが思った瞬間にはもう、アルシュマイナーの凶器が上から青年の首にぐいぐいと差し込まれ、次いで木工細工でも作っているかのごとくにギコギコとやりだした。囚人の目がぐるんぐるんと回ったが、彼はそのとき、あの悪霊が傍に来て彼の手を小さな両手で引っかいたりバシバシ叩いているのを感じた。

『カルちゃんのバカバカバカバカバカ、ずっと探してたのに遅いんダ！　お誕生日プレゼントだってくれないし！　ミーちゃんどんなに苦しかったか、ボッチでシかったか、ずっと聞いてもらうんだもん。ずっとずっと、抱っこして聞いてもらうんだ』

『わかったわかった』と彼は言った。『ところで俺、地獄絵図って本を見たことあるんだけどねぇ、そこですごく行ってみたいところがあるんだよ』

『何よ、コワイ話しならよしてよ、アタシがオカルト嫌いなの知ってるくせに！』

　んなこと初耳だし今のお前以上に気味悪い存在もないと思うけど、と考えている彼の首は既に半分以上が胴体から離れていたが、赤い液体は虐殺者が思ったよりも飛び散らず、床に噴出して溜まりを作っていた。後ろの二人の男達は思わず目をそむけ、一人がその場に嘔吐している。

『――怖くねぇって。賽の河原っていってな、親より早く死んだ子供が行く。んで、そこらに転がってる石を積みあげると親の顔が見れるんだけど、うまくつみあがりそうになるとヴェシュマみたいな奴がきて崩してしまうんだと。どう思う？　セコクねぇこのやり方』

『う…　ん、そうね、バカみたい』

『だろ？　俺さ、別に親の顔なんか絶対見たくないし、この意地悪オヤジどもを逆にいじめてやりたくてな。奴らが崩しそうになったところで、俺自身で崩してやるんだよ。あとは子供ら集めて石騙し普通の石を使って遊ぶゲームの総称。地域によって様々大会とか開催する。連中、冥府の王に怒られると思って大騒ぎだぜ』

『性格わる…　んでも、イイわねぇ、カルちゃんにしてはまぁまぁ。…アレ、でも…

　ちょっと待って、そのルールじゃアタシ行けないじゃないのよ！』ヒドイ、何のかんのと言いながらうまいこと見捨てて地獄の事務員とでも浮気する気なんでしょ、河原に厚紙の箱でまたミーちゃんのこと流す気なんでしょ、と立て続けに喋り散らす黒焦げちゃんに、今や首なし男となった彼は全く感嘆して言った。

『その道じゃなかなかの天才と自負していた俺も、お前の妄想力には脱帽だ。しかし参ったな、こりゃ。お前、義父さんより後に死んだのか。うまくいかねぇなぁ…』

「はははははははははははあははははははあああああははははははひふひぇぇっ、

ぐ、軍神リグア万歳！　サパニ・キィフ・シュイラーダート万歳！」

　がらんとした地下の処刑場にアルシュマイナーの声がこれ以上ないというほどの虚しさを醸し出して響く。提督は、ぼんやりとしたいつものまなざしで半目になっている青年の髪を掴んで持ち上げ、腕を伸ばして生首を上空に掲げた。

「見てるか、キィフ、俺はやったぞ！」

だがもはや誰の御霊も、あの水美な雪娘どころか殺されたものですら彼のことなどどうでもよくて、一切省みていない。彼は手のものを血溜まりに投げつけ、カツンゴロンという音を立てた。そして肩で息をすると、「片付けておけ」と命じて去った。カルツ・ピルスの無残な屍のことはもちろん隠されたのだが、どうもお付の二人のうちどちらかから漏れたらしく議会で大問題になり、提督は色々言い訳をしてなんとか地位を守ったが、遺体は人道的な意味で中央大陸の家族へと返された。そちらでもこのことが大いに取り上げられたが、サディンカプルの軍事力を恐れている祖国では特段の動きも見られなかった。

こうして、彼の存在は常識の織り成す歴史の闇に、当たり前のようにして消えた。

*――ム、そんな特別を認められるか。罪人は星の数ほど無限、いちいち例外を作ってたら示しがつかぬ――願いを聞いてくれないと屁をかけてやるだと？　やめぃ、あまりにもちっぽけすぎる貴様なぞ、潰してもなんの特にもならぬ。大体、貴様はあの子供に殺されたのではなかったか。…全く、どいつもこいつも狂っておるわ。狂気はこのリグア様の専売特許だというのに――もう知らん、ええぃ、勝手にせい、朕は眠る。次に朕の眠りを妨げるようなものがあれば、死刑などの軽い刑罰では済まさんからよく覚えておけ――*

「お前…！　そうか、お前も俺の話を聴きたいか」河原でぼんやりとしながら、番鬼や子供の霊達に創った物語を聞かせてやっているカルツ・ピルスの傍に、ちょこちょこと引きつぶれた亀虫が歩み寄ってきた――そして、その後ろをよろよろと辿るようについてくる姿。

「ちゃんと迎えに来てくんなかったな、バカカル！　嫌い、ママなんか。大っ嫌いだ」

あの目と繭の間の小さな一本皴だけが、はっきりと識別されることができる。体だけでなくて首だけになることを選んだカルツは、その焦げ焦げ娘にひょいと抱き上げられた。

「…でも、マァマはアタシのこと大好きだって知ってるヨ。だからしょうがない、一緒にいてあげる」

　――ふふ。はいはいそうだね、と青年の首は思った――さて、ギャラリーも一人と一匹が増えたようだし、続けよう。その大鯨王子が引き連れた数多の空飛ぶ海竜騎士団は…

――ええ、お察しの通りでありまして、その踏破家が見つけたモノと言いますのが、その書物でございます。どうも持ち主が死ぬ前によほど未練でもあったのか、強い念が投射されたためにこの本は息をしており、今までのような話を打ち明けただけでなく、さらにページを開いてみると、その著者が書いたはずのない、無理やり繋げたような、全く様子の異なる幻想物語までが後半に脈絡なく続いていたというのです。何でも、ある王国の興亡期みたいなアリガチな奴で、そんなに面白くもなかったけどハッピーエンドだったからまぁ…　と彼は言っていました。

　でも、私は彼と違う感想を抱きました。その後半の物語というのは、砂魚の青年があの世から書き送ってやったものではあるまいか、と。私も書く者の端くれとして大いにその添削をしてやりたいと思いましたし、変なライバル意識を燃やして読んでみたいと思ったものですが、彼が全てを一通り識った瞬間、それは脆くもボロボロに崩れてしまったそうです。

　それはそうですよね、神様のごとくに、『億単位でもなかろう』などと我々には言うこともできかねます。何しろ数百万年前の出来事でございますから、そもそも本当にあったことだったのかどうかすら――

【補足・浮島空紀その後】

* 異常重力地帯として有名になるミョウチンキ大島とは、恒星ツェトニウスの成れの果てである。この星だけは核活動停止および爆破の過程がうまく連動しなかったため、海洋に落ちて壊れながらも海の上に浮かぶ特殊な島となった。烈風が生じ、大津波で付近海岸に面する多くの都市が呑みこまれたが、直接陸地や海面に落ちたわけではないので、これでも被害はまだ小さい方だったのである。
* ほとんどの浮島が惑星の爆発に飲み込まれるか、特殊重力消失時に一瞬発生した高圧によって潰されてしまい、そのごく僅かな残りが地上に落ちて被害を与えた。ところが、いくつか落ちなかった浮島が存在し、それがどうして浮かんでいるのか、以後の学者達を悩ませるミステリーとなる。
* サディンカプル王朝は一度ディキルバハーム帝国としてゼレファス地方を制圧するが、別の大陸に見境なく戦争を仕掛けたために疲弊し、『死の焔』の教団政党に主権を乗っ取られた。これに反抗する核火神教の勢力が長い闘争の末に打ち勝ってイーマス王国となし、再びかつての勢力図に近い睨み合いの均衡が続くことになる。
* 沈星と空域の消失で展鉄の能力が失われ、ヴェシュマや飛空挺などのこれに頼っていたほとんどの科学的産物は無意味なものとして打ち捨てられ、姿を消していった。
* 地獄・天国などの実在や様相に関しては宗教によって諸説あり、本稿の表現が学術的に正しいものであったかは明言しかねる。参考までにタラムの現代広範生物学研究所の発表では、――死んだものの魂を形成するエナギーは梵子的もしくは電離的な原理で霊体生物化することもあるが、これをもって輪廻と称す。例えば虫者の『生まれ変わり』は混沌期生命誕生の手法に模し、別次元にあらかじめ魂の卵塊を用意しておくことにより、これを利用したものである――このように、あの世という概念すらそもそも話題にされていないことが多い。
* 本稿の内容を引かずとも、この時代にそれぞれの理由と距離を計って虚神達が干渉した可能性があるということから、歴史学研究の見地では単純に、この天地戦争が光と闇の虚神による代理戦争となってしまっていたとする見方が主流である（なお、全くの蛇足であるが本稿の訳者はそれと異なる見解を持つ。神が人を利用したのか、その逆なのか、そのどちらも言え、もしくは全く無関係か…）。他神も人命も『聖か邪か』という二極争いのための小さな碁石としか思わなかった両神だが、近代後期の異次元人種入植時に、最初で最後となる直接戦闘の末、互いに融合消滅を引き起こすというあっけない末路を辿る。それが『裁き』だったのか、それすら彼らの『計画』であった――虚神を超え、概念とイデオロギーそのものの『神』になる――のかは、ちっぽけな人間の思考ではなかなか計り知れぬことであるに相違ない。